

For an Inclusive Society

EFFECTOR

vol.6 ——— コロナ禍 2 年目、どう過ごせた？

P.2-3 コロナ禍 2 年目の学生生活座談会
P.4 変人ー変える人ー京信人材バンク
P.5 龍大発学生ベンチャー「RE-SOCIAL」
P.6-7 龍谷大学学生気候会議振り返り座談会
P.8 田中宮市宮住宅自治会の防災の取り組み
海外との地域連携「日台連盟」発足



コロナ禍2年目の学生生活座談会



2020年から蔓延したコロナウイルスにより、今の大学生は様々な行事が中止になり授業もオンラインで行われるなど、今までと全く異なった生活を強いられてきました。そのような環境の中で二年間過ごしてきた学生たちは現在どんな心境なのでしょう。今回は自宅から学校に通う「自宅生」と、大学の近くで一人暮らしをしている「下宿生」そして3 L APARTMENT*で一人暮らしをしている二名の「3L生」というそれぞれ生活スタイルの違う四名の方による座談会の様子をお届けしたいと思います。

*3L APARTMENTとは「LOCAL・LEARNING・LIFE」の3つのLをコンセプトに、大学生が市営住宅に入居し、自治会に加入して地域や学生同士つながりながら暮らす、感触とぬくもりのある下宿スタイルです。京都市・田中宮市営住宅・龍谷大学の三者が連携して運営をしています。



ファシリテーター



三木 俊和 氏
伏見いきいき市民活動
センター・センター長

3L生



ほっそー
政策学部三回生

下宿生



うきょう
経済学部三回生

パネリスト

3L生



あかね
法学部三回生

自宅生



みーちゃん
経済学部二回生

三木：それでは座談会を始めさせていただきます。まずはそれぞれどのように暮らしているのかという所から聞いていきしたいと思います。下宿か自宅かなど、どんなライフスタイルなのか教えて頂いても良いですか？

ほっそー：政策学部三回生のほっそーです！竹田駅から歩いて10分ほど、大学からは自転車で10分ちょっとくらいのある田中宮市営住宅に実際に住んで地域の人と関わりながら暮らす3L APARTMENTに所属して、一人暮らしをしています。ライフスタイルはというと、基本的に下宿にいたことはあまりなくて、ずっと外にいたりアクティブに過ごしていますね。家で勉強することが出来ないの、ちょっと時間が空いたらすぐ学校に行くようにしています。

うきょう：経済学部三回生のうきょうです！僕は一人暮らしをしています。ただ一人暮らしをしないでと思ったことはなく毎日楽しく過ごしています。一人暮らしにより自由な時間も増えて充実していますね。ライフスタイルはというとテニス部に入っていて、コロナ禍になる前はその部員を家によく呼んだりしていました。でもコロナ禍になってからは出来ていないですね。最近は少人数ではあるんですけど少しずつそういうことがまた出来るようになってきました。



あかね：法学部三回生のあかねです。私も同じく3L APARTMENTに所属しています。最近のライフスタイルとしては、学校に行くのが面倒になってきました。少しずつ対面授業が再開してきたんですけど、そのためだけに学校にわざわざいくのもあって思いますね（笑）

みーちゃん：経済学部二回生のみーちゃんです。大阪の自宅から学校に通っています。自宅から学校は電車で一時間ほどかかります。ライフスタイルとしては、基本的には親に頼りっぱなしの生活をしていますね。ご飯や洗濯・食器洗いなどの家事は親に任せっきりです。

下宿生と自宅生の自由の違い

三木：皆さんそれぞれで「隣の芝生は青く見える」というか、下宿生は自宅生を、自宅生は下宿生を羨ましく感じることもあるかも知れません。ここからは話をさらに深堀りするためにフリックトークをしていききたいと思います。質問に対する答えを一言で書いてみてください。

- ①下宿生（自宅生）が思う下宿の良いところ
- ②下宿生（自宅生）が思う自宅の良いところ

ほっそー（3L生）

①時間が自由に使える

通学などの移動にかかる時間がないというのがまず一つ。そして自宅生の方と話していると、ご飯の時間が決まっていたり、お風呂の時間が決まっているという理由で予定がずれたり、急な予定に合わせづらいという印象があります。その点一人暮らしだと、自由に使える時間が幅広くなって、バイトに充てる時間を増やすことができたり、遊ぶ時間を増やせたりするので、それが下宿の良いところだと思いました。

②何もしなくても生きていける（お金が自由に使える）

書いた通りなんですけどバイトしなくても生きていけるし、バイトで稼いだお金は遊びに全部使えて、使えるお金が自由なのでこれが自宅の良いところかなと思いました。

うきょう（下宿生）

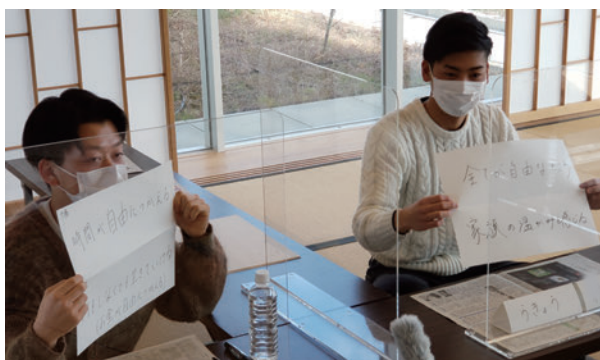
①全てが自由なところ

ほっそーも言ってくれたように時間が自由に使えるというのももちろんあるんですけど、僕の思う自由は自分の好きなものを買えたり、食べたい料理を作れたりするところが特に自由かなと感じます。あと僕は靴とかが好きで、今も靴箱に入りきれないくらい家に靴があって、多分実家にいたら親に怒られると思うんですけど、今はそれが無いのでそういう所も自由かなと思います。

あとはロードバイク買ったりプロジェクターを買ってホームシアターみたいにして、結構個性的な部屋になってきていて、そのような自由な生活を送っています。これは下宿でしか出来ないのが下宿の良いところかなと感じます。

②家族の温かみを感じる

これは下宿し始めてから気づいたんですけど、結構僕の家庭が家族の仲が良い方で、一軒家で暮らしてたんですけど、寝るとき以外はみんなリビングに集まっているみたいな状況でした。そういう状況で暮らしていたので急に一人になった時に、寂しさや孤独さをとても感じてしまいました。だから常に話す人がいて家族の温かみを感じられる所が実家の良いところかなと思いました。



あかね（3L生）

①好きな時に好きなことが出来る

友達と夜遊べるというのもあるんですけど、一番は実家が割ときっちりしているというか堅い家だったので、夜食とかは基本食べるのが禁止されてました。だから今は気にせず夜にカップラーメンをすすれるのがいいですね（笑）

②何もせずダラダラできる

ダラダラ出来るのが良いところと書いておいて矛盾するかもしれないんですけど、ダラダラしてたら時間ももったいないなと思ってしまいます。そう思いつつ下宿先ではずっとダラダラしてしまっているんですけど、実家に帰るとダラダラしているのをちゃんと怒ってくれる人がいるので、そのおかげでまともな生活が出来ます。そこが良いところかなと思いました。ちゃんと叱ってくれる人がいるのはありがたいですね。

みーちゃん（自宅生）

①自由

みなさん仰っていたんですけど、何やっても何しても自分の責任なので、その自由さが良いところかなと思いました。

②親に頼れるところ

家事を自分でやらなくて良くて、親に任せられるという所が良いところだと思います。他には学校の課題に取り組んでいる時に「これってなんて言葉にしたらいいんやろ」などのちょっとした相談が出来たり、話す人がいる所も自宅の良いところだと思います。

三木：自宅生が下宿生に思う印象と下宿生が自宅生に思う印象はほぼ一緒でしたね。下宿生は「一人の自由さ」を感じていて、自宅生は「親がいるからこそその自由さ」を感じていることが分かりました。どちらにも自由な部分はあるけれども、その「自由さ」の違いが下宿生と自宅生で大きく違う所なのかもしれないですね。

いつもと違うことを

三木：コロナ禍になったことにより自分の普段のライフスタイルが大きく変わった所はありますか？

ほっそー：自分は一回生から二回生になる時にコロナが流行りました。僕元々一回生の時は実家暮

らしをしていて、二回生のタイミングで一人暮らしが始まり、コロナ禍も始まりました。なので本当に住む場所、バイトなど全てが変わりました。コロナ禍だけど引きこもりになるのは嫌だったのでバイトを一生懸命探したり、なんとか自分で稼げる方法を探していました。

うきよう：コロナ禍になって僕は凄い新鮮でした。というのも体育会系のテニス部なので、コロナ禍になる前は朝から晩まで部活して、帰ってきて寝て、また朝になれば部活行っってという生活をしていました。でもコロナ禍になって部活が禁止されて授業もなくなったので、自分の自由な時間がとても増えました。そこで趣味を増やしたりして個性を出し始めたという感じですね。ただ最初の方はYouTubeとかテレビとか見てダラダラしてたら夕方になっちゃって、時間はあるけど上手く使えなかった感じですね。

あかね：コロナ禍1年目は学校が閉まっちゃって、図書館なども使えなくなってしまったからなのか分からないんですけど、なぜか勉強意欲が湧いて、マクドナルドでめっちゃ勉強したりしていました。学校が始まってからは元通りに勉強しなくなってしまいましたね（笑）「コロナ禍だからいつものことをしよう！」と考えた結果選んだのが勉強なのかもしれないです。

みーちゃん：コロナ禍1年目はまだ一回生で「大学デビューしてやろう！」という気持ちがあったので、筋トレしたり美容に力入れたりしてましたね。このみんなに会わない期間に自分を磨いておこうと思ってました。感染対策という意味ではコロナ禍になって最初の方は電車に乗らないようにしていました。対面の授業が再開してから電車にも少しずつ乗るようになった感じです。たまに電車の中でマスク外している人がいると「うわぁ」って思うことはありましたね。コロナ禍2年目からは大学に毎日行くようになって「大学生しているなあ〜」という感じがしていました。

三木：ライフスタイルがコロナ禍になったことにより変化してしまった所もありますが、その変化の中でも出来ることをしようと考えて、時間を皆さんが皆さんなりにポジティブに使おうとしていたようですね。



少しでも前向きに

三木：ここから再びフリップトークをさせていただきます。コロナ禍になったことにより、大学生活がどのように変わったのかというところを教えてください。ただけいたらと思います。そこで次の二つの質問の答えを一言で書いてください。

- ①コロナ禍1年目の大学生生活のキーワード
- ②コロナ禍2年目の大学生生活のキーワード

うきよう

①年中休暇

コロナ禍1年目の前半は学校自体がなくなっちゃって、部活とかも全然できなかったんですけど、秋ごろからだんだん部活も再開してきて、授業もオンラインと並行して始まりました。でも結局のところ家にずっといたので、曜日感覚もなくなり年中ずっと休んでいる感じでしたね。

②ハイブリッドな生活

コロナ禍2年目は規制が緩んできて、部活も一日三時間までなら出来たりしました。なので忙しくもなく暇でもなくという生活を送っていました。授業はオンラインと対面とどっちもあったので、ハイブリッドな生活が送れていたなと思います。ただオンラインだと話を聞いているだけになってしまふことが多かったので、やっぱり自分は対面で受ける授業の方が好きでしたね。

あかね

①新鮮

一人暮らしが始まって、すぐコロナ禍になったので時間も増えて色々なことが出来て凄い新鮮な気持ちで一年過ごすことが出来ました。

②飽きた

コロナ禍1年目は新鮮だったんですけど、コロナ禍2年目になってもコロナの影響で3Lの色々な行事が中止になったりして「去年は無理だったから、今年なら出来るだろう」と考えていたのに出来ないことが多くて、だからもうコロナ禍に対して「飽きた」という感じですかね。特に私はお祭りが好きだったので、人が沢山集まるお祭りなどはやりたかったなと思いますね。



ほっそー

①耐

理想は大学まですぐ行けて、3Lやゼミなどの活動も今まで通りできて、バイトも普通にできるという生活だったんですけど、それが出来なくなってしまって、バイトも本来やりたくないものを渋々やったり、地域の活動に参加できなかったり、友達と遊べなかったり、せっかく大学の近くに住んでいるのに、大学に行かなかったりしていたので、色々なことを我慢してたなと感じました。

②大人

コロナ禍2年目でも耐えるということは結局変わらないのかなと思うんですけど、その中でもコロナ禍1年目で得たものがありました。それはコロナ禍への馴れもあると思うんですけど、考え方自体が大人になったと思います。具体的に言うて僕は3Lやゼミなどの色々な学生団体のリーダーをやったりしているんですけど、一人一人に合わせた対応が出来るようになった気がしますね。コロナ禍で人に会えなくなって「存続の危機」というか、活動が出来なくなり、面白くなってやめてしまう人も出てくると思います。その中でリーダーなど重要なポジションをすることが多いので、それぞれの場でそれぞれに向けた対応が出来たのかなと思います。

みーちゃん

①大学生体験

初めて大学に行ったのが一回生の九月とか十月とかそれくらいの時期で、そこから大学生が始まったという体感なんですけど、そこで「大学広いな〜。建物でかっ！」って思ったりしていました。ただそれでも一回生の間は学校に行くのが週一回とかだったので、学校に慣れるための期間という感じでした。

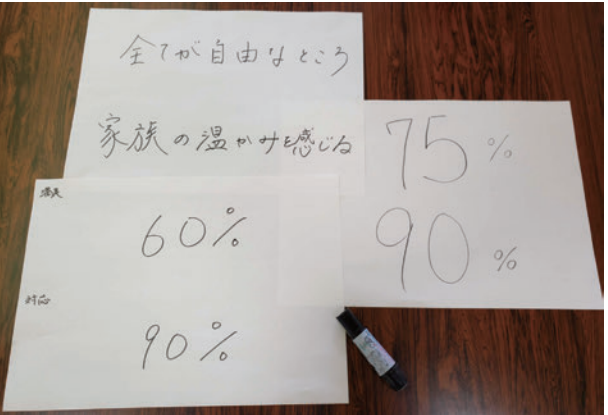
②大学生

二回生になって結構大学にも行けるようになったので、前は電車の回数券を買って通学していたんですけど、定期を買うようにもなりました。ゼミが始まったので、大人と関わることが増えたりして、先生と仲良くなれたりしましたね。

コロナを言い訳にしない！

三木：この座談会のまとめとして最後のフリップトークをさせていただきます。

- ①今の大学生活への満足度は何%？
- ②今のコロナ禍への対応度は何%？



ほっそー

①75%

やっぱり自分の中で、好きなバイトを自分で選んで好きなだけできたり、他にも海外旅行などに行きたかったといった理想があります。それを叶えられていない所が残りの25%になるのかなとは思っています。

②90%

コロナ禍にも慣れつつあって、その中でも出来ることを模索しながら色々な活動が出来ました。その上で自分が成長出来る部分は沢山あったので、コロナ禍に対応して自分らしく生活できたのかなと思います。

うきよう

①60%

コロナ禍になってからいろんな活動が出来たし、その中で自分の個性を出すことが出来たという所が60%になったんですけど、残りの40%はオンラインと対面という2つの授業の受け方を経験して、自分是对面の方が好きだなと感じたし、オンデマンド型だとしてもだらけてしまうところがあるので、せっかく授業料を払っているのに活かされてない所が不満なのでこのような数字になりました。

②90%

オンライン授業にも慣れてきたという所に対して90%です。もう最近ではコロナ禍の対応に関して特に困っていることがないので、この数字になりましたね。

あかね

①62%

私もうきようさんと同じで残りの38%は対面で授業を受けたいし、さらにその対面の授業をいろんな友達と受けたいという感じですね。

②90%

もうコロナ禍に慣れてしまったという所が本音なので90%という数字になりました。

みーちゃん

①80%

私は二回生でコロナ禍になる前の大学というのを経験していないので、今に満足しているからこの数字になりました。だからコロナ禍になる前の大学を経験していたら、今に不満を感じてしまって数字も変わっていたかもしれませんね。

②90%

最近コロナ対策がおざなりになってきている所はあると思うんですけども、自分自身がコロナ禍に対応できているのかという所で考えると出来ているのかなと感じます。Zoomとか結構毎日のようにして、コロナ時代の対応だなと思いますね。



最後に

三木：今回の座談会を見ていてコロナ禍になる前を知っているか、知らないかというところも大きな違いだと思いました。コロナ禍になる前の大学生からしたら、飲み会や大学生活の変化を感じると思います。ただ逆に言うてこれからの大学生はみーちゃんのようにコロナ禍の中で大学生としてスタートするから「懇親会や社会や地域などで対面で行うことの意味がわかりにくいこと」や「オンライン授業がある意味での便利さ」が当たり前になる学生の方が増えていくかもしれないですね。戸惑いの多かったコロナ1年目を超えて、コロナ2年目はそれぞれが対応しながら、新しい楽しみ方を見出すことが出来ているんだなと思いました。ありがとうございました。

<取材：文学部 宇山 友悟／理工学部 出野 雅治>

変人

変える人

「まちのワークインフラ」創造への挑戦



京信人材バンク

京信人材バンク 共同代表

矢野 凌祐さん 新田 廉さん

庫内 ベンチャー事業を京都信用金庫内で立ち上げられた矢野・新田共同代表に「まちのワークインフラ」をコンセプトに掲げ、事業を立ち上げられた理由を元に、お二人の目指されている世界観、さらには金融機関の未来へ向けた変革についてもお話を伺った。

学生時代の「憤り」がきっかけ

なぜ「京信人材バンク」を立ち上げられたのでしょうか？

矢野：私は、母子家庭で育ち奨学金で大学に通わせてもらっていました。そして4回生になり、進路選択で「大学院進学」や「起業」などの選択肢を模索していました。

しかし、その時に実感として湧いてきた多額の奨学金の存在。リスクを背負うことに躊躇しました。そこから「環境の違い」で選択肢を狭めざるを得ないことに理不尽さや、憤りを感じるようになりました。

そこでまずは「地域のお金の流れ」を変えたいという思いから京都信用金庫に入庫しました。入庫してからは、思いを実現するために仲間を募り、構想を練っていく中で、「お金」ではなく、「働き方」に焦点を当てるようになりました。それは、「働き方」を多様にすることで選択肢が増えるのではないかと？という仮説ができたからです。

その人にあった「働き方」を実現するために、地域に必要な「まちのインフラ」を作る。そんな思いで京信人材バンクを立ち上げました。

働き方の「枠」を超えていくこと

「今までの枠を超えた働き方を作り、支える」という京信人材バンクさんの想いについて教えてください。

矢野：まず、枠とは「副業」「兼業」のような新しい「働き方」の枠。もう一つは「組織」「会社」「立場」などの垣根のことを指します。現状の社会では、枠があるからこそできていないことが多いと思っています。これからは、人が行き来する働き方、組織のあり方が実現できる。そのような価値観を、まずは地域で作りたいです。その背景には、「チャレンジしやすい社会を作る」という想いが存在します。

また、横のつながりという側面でいうと、一般的には、社内の関係だけで止まることが多いですが、チャレンジできるきっかけというのは、実は社外に多くあるのではないかと考えています。

なので私たちは、「働き方」を通して社外の人と繋がり、チャレンジするきっかけをデザインしたいと考えています。

高まる「多様な働き方」へのニーズ

事業を初めてからの1年半を振り返ってどのようなことを感じましたか？

新田：コロナウイルスの流行で、多くの人が自分の働き方、さらには生き方をも考えるようになってきています。その影響もあり、自分たちが当初想定していたよりも働き方の多様性へのニーズが高まっています。

私たちは、そのニーズに対して、どのように答えるべきか、試行錯誤の毎日です。

変化する「仕事」の価値観

「働き方の多様性」についてもう少し教えてください。

矢野：近年、若い世代ほど社会にいい会社、地域に貢献している会社を選ぶ傾向にあると思います。そのように、私たちのサービスを利用していただく方々も、ただ儲けるだけではなく、今までやってきた仕事のスキル・経験を活かして社会の役に立ちたいと考えている人が多いです。ただ、どこでもいいので働きたいというわけではなく、事業に共感をすることで仕事をしたいと考えている人が増えています。

また、お金がもらえなくても働きたい、もっといとお金を払ってでも働きたいと考えている人もいます。

新田：一般的な「副業」とは違い、私たちはよく「複業」という字を使います。複数の仕事をする。ライスワーク（ご飯を食べるための仕事）とライフワーク（夢や自分の好きなことを追求する仕事）という価値観も散見されますが、そのようにお金を儲けるための仕事と、ビジョンに共感できる会社で仕事やお手伝いをする人も増えています。そのニーズは、副業が解禁された大企業などにも存在します。このように、私たちの生きる現代の社会は、全員が同じ価値観ではないです。

しかし、そのような人たちが繋がれる機会や仕組みが存在しない。なので、我々のサービスから人と人、人と企業を繋ぐ架け橋になりたいと思っています。



目の前のことに「一生懸命」取り組むこと

社内で自分のやりたい仕事をするためにはどうすればいいですか？

新田：常にどうしたらやりたい仕事ができるのかを考えることです。私たちも、最初は営業を中心に仕事をしていました。そこで、キャリアを俯瞰して考え、自分のやりたいことに近づくように動いていきました。例えば、私たちは仕事終わりに、自主的な勉強会を行っていました。

矢野：まず目の前の仕事を一生懸命やることです。それが全ての土台になると思います。それと同時に、やりたいことを発信し続けることです。やりたいことを自分の中でしまっているのは誰にも届きません。なので、発信し続け、チャンスを掴みにいくことが重要だと思います。

金融機関の「変革」

お二人が入庫前後で感じられた金融機関の姿とはどのようなもののでしょうか？

新田：ある意味で、京都信用金庫に入庫する前と後では印象の違いはなかったです。他の金融機関よりも自由に仕事をさせてもらえる環境でした。

また、入庫以降、金融機関全体が変化してきていると実感しています。例えば、本業での利益（金利など）は社会全体の変化から圧縮されてきています。

そこで私たちは、金融機関のリソースを活用し、新たなビジネスモデルを創造しています。なので、私たちが行なっている「京信人材バンク」の仕事も、ただの人材紹介業ではなく、「まちのワークインフラ」というように、まちに根づくインフラとなるような仕組みづくりを念頭に置いています。私たちだけではなく、多くの金融機関が変革を迎えざるを得ないのではないかと感じます。



「まちのワークインフラ」を形にする

最後に、今後の展望・ビジョンを教えてください。

矢野：ちょうど最近オンラインコミュニティを作り、副業・兼業人材を集めています。そこに集まれば、その人の環境に合わせた働き方が実現できる。これを地域に浸透させていきたいです。将来的には、「まちのワークインフラ」というものがそれぞれの地域ごとに広がっていくといいなと思います。

新田：社会にいい企業を増やしていきたいです。それを、自分たちの行っている人材紹介という面でサポートしていきたいと思っています。企業を横断する「地域社員」を増加、循環させ、地域企業の活性化に寄与したいです。

取材を終えて（EFFECTOR スタッフ感想）

これまでの「当たり前」が「当たり前」でなくなる時代にきていると思います。その傾向は、京信人材バンクさんが扱われている「働き方」という領域でも顕著に現れているのではないのでしょうか。

その中で、お二人の目指されている世界観である「まちのオフィス」は、人手不足が叫ばれる地域社会において大きなインパクトをもたらす可能性を感じました。今後さらに事業を拡大されることで、理想が現実になった社会がとても楽しみです。

<政策学部 安井 大斗>

人手不足が様々なところで言われている社会で、「やってみたい」という気持ちやその人が持つ能力を発揮することで、会社という枠を超えて地域の人々の力になれることは大きいと感じました。

また、個人運営ではなく信用金庫という強力なバックアップがあることで安心感を持てるなど、これまでにない新たなコミュニティの可能性を感じました。これからはひとつの会社の中だけで能力を発揮するのではなく、もっと広い規模での活躍が求められるような変革期であるように感じました。

<社会学部 吉田 千尋>

京都信用金庫 京信人材バンク

所在地：京都市下京区四条通
柳馬場東入立売東町7番地

Mail info_jb@kyoto-shinkin.jp

URL https://kyoshin-jinzai.jp



龍谷大学発学生ベンチャー 株式会社 RE-SOCIAL

—現在日本の地域の課題として共通して挙げられる獣害被害の問題—
人間の経済活動が密接に絡んだこの問題に株式会社 RE-SOCIAL は挑んでいる。
RE-SOCIAL の代表取締役である笠井大輝さんに、この獣害被害の問題に挑んでいく中での葛藤や苦難、これからの展望を伺った。

起業に至るまでの道のり

最初に獣害被害の問題にどのような経緯で関心を持ったのかを聞かせてください。

僕は龍谷大学政策学部で、地域や社会の課題をどうすれば解決できるかということを勉強していました。所属していた深尾ゼミでは、社会の課題や地域の課題に対して、ビジネスを通じて解決するというソーシャルビジネスを研究していました。その中で PBL※1という授業では、一つの地域に実際に学生が同行して、地域、住民、行政、事業者の方とその地域の課題についてディスカッションして、出てきた課題をどうやったら解決できるか考え、実践していきました。この PBL で関わったどの地域にも共通して存在していた課題というのが獣害被害でした。シカやイノシシを中心とした野生動物が畑の作物を食べてしまい、農家さんの収入が減ってしまうような農作物被害、シカに限った例では冬場餌がなくなってくると木の幹の皮を食べるというような森林被害が、どの地域でもかなり深刻な状態であるということで、まず獣害被害について研究し始めたのがきっかけです。

ジビエの解体処理から販売といった課題をどのように解決していったのですか？

まずジビエ※2がなぜ9割も捨てられているのかを調べ始めて、その中でぼんやりとなぜジビエが流通しないのかという理由が見えてきました。そして次に検証に入り、全国のジビエ事業者の中で課題を乗り越えてビジネスとしてできているところを調べると、徳島県にあるジビエ事業者（以降、師匠）にたどり着きました。師匠のところに行き、ヒアリング調査を行いました。ヒアリング調査の結果、師匠のビジネスモデルならジビエを流通させる事ができるのではないかと考え、ヒアリング調査からしばらくして、泊まり込みで修行に行くことにしました。そこでシカを捕まえてくるところから解体、精肉加工して販売する所までをすべて教わりました。そして京都に帰ってきて、どこでこの事業をしていくかを京都府下の自治体に聞きました。そしてご縁があり、笠置町で事業を展開していくことになり、4回生の11月に会社を設立して今に至ります。

事業内容

師匠のビジネスモデルは他の事業者とどこが違うのでしょうか？

一般的な事業者では3つほど課題があります。1つ目はシカ肉の硬さや臭みが強いこと、2つ目に安定供給が難しいこと、3つ目がお肉としての効率が悪いということです。この3つ目の課題はイメージがわからないと思うので説明すると、イノシシやシカは、だいたい体重の2、3割ほどしか肉が取れず、残りの7割から8割は内臓や骨で構成されています。美味しくいただくという観点で見ると、食べられるところが少なく、更に労力やコストもかかることで肉の単価が上がってしまい、なかなか流通させることが難しいという状況です。師匠のところでは、この3つの問題をすべて解決していました。まずシカを生きたまま捕まえて、生きたまま血抜きをします。この生きたまま血抜きをする生け締めをして完璧に血抜きをすることで硬さや臭みがなくなり、1つ目の課題がクリアされます。2つ目の安定供給の問題については、一時養鹿を行っています。イメージしやすいのは、寿司屋のいけすのような感じです。生きた状態で一時的に飼育することで、注文があったら安定的にそこから供給するという形にして2つ目の問題がクリアされます。3つ目の課題は、師匠のところではハラル認証を取得しています。ハラル認証というのはイス

ラム教の人々が食べることを許された食品です。シカ肉で初めてハラル認証を取得したのが師匠でした。イスラム教の文化では骨や内臓を料理に使うという習慣があります。更に2019年頃はたくさんの海外の観光客が日本に訪れていて、ハラル認証を取得した食品はかなり需要が高まっていました。肉として美味しく食べられる2、3割を日本人向けに販売して、残りの内臓や骨をイスラム教の方に販売する事によって3つ目の課題が解決されます。

苦労話

笠置町のコミュニティーに入るにあたって大変だったことはありますか？

本当に大変な時もありました。「お前らには一切協力せんからな」と言われたこともありました。またコロナ禍になって根も葉もないうさを流されることもありました。

その状態をどのように協力して行く形にもっていききましたか？

それは本当に行動で示していきました。地域の方々は、僕たちがいついなくなるかわからないといった感覚で、一步引いている感じでした。コロナ禍で思うように収益が上がらない中で、笠置町の街中のありとあらゆるバイトをしていました。

アルバイトをして地域の方に名前を覚えてもらうところからはじめたのですか？

もう本当にその時は生きていくためだけにアルバイトをしていたのですが、地域の方々からはコロナ禍で会社がうまくいかない中で、それ乗り越えようと毎日どこかでバイトしているのを見て「なかなか骨があるやんけ」と思われて、見られ方が変わり始めました。

鹿肉処理から販売まで、これまでのお話以外で大変だったことはありますか？

はっきりいうとすべてが大変でした。僕らが大学3回生のときに会社を創業しようと決意して、4回生の2019年11月29日の「いい肉の日」に会社を設立しました。しかし、その約一ヶ月後の2020年1月に中国で初めてコロナが見つかり、3月に初めて日本でもコロナが見つかったということで、社会のありようが変わってしまいました。僕らはもともとインバウンドの観光客を対象に、ホテルや飲食店に対してハラル認証を取得したシカ肉を流通させることをビジネスモデルにしていたのですが、それがすべて白紙に戻るというのがかなり衝撃的でした。2020年4月の緊急事態宣言によって、名だたる創業何百年の会社が潰れていく中で、設立して半年の会社がこの中を生き延びようとするのは大変でした。そこが一番大変だったことかもしれないです。

そのような困難をどう乗り越えていききましたか？

まずホテルや飲食店に対して販売するBtoB※3のビジネスモデルを早々に諦めて、一般的な消費者の方に物を販売するBtoC型※4のビジネスモデルへの転換を進めました。一般的な消費者の方にどうやったら食べてもらえるのかということを考えた結果、本当に焼くだけで食べられるような形でBtoCに関しては商品を展開していく必要があるという結論に至りました。弊社で販売しているシカ肉のステーキや焼肉、シカ肉ハンバーグ、シカ肉ソーセージなどはすべて味付けをして、家に届いたら開封して焼くだけで食べられる商品を販売していくことになりました。自粛期間で家にいる中、おうちバルやオンライン飲み会が流行り始めたタイミングで、シカ肉はワインに合うと言われていることを利用して、ご自宅でワインを飲む方に限定して、このシカ肉を家で食べることを発信してきました。



RE/SOCIAL

株式会社RE-SOCIAL
〒619-1301
京都府相楽郡笠置町
有市東畷23番地
<https://www.resocial-kasagi.com>

このように B to C 向けの商品を打ち出すことによってネットの販売がかなり伸びたことが、今会社が生き残っている理由ですね。

まとめ

これからの RE-SOCIAL のビジョンはありますか？

肉を売るという事業だけを行っていたところから、シカ革とペットフードという3つの事業に増える所が変化になると思います。この3つの事業を立ち上げることの利点としては2、3割しかお肉としていただくことができないところを、シカの革やペットフードのブランドを立ち上げたことによって、残りの骨や内臓などの7、8割を商品として流通できることが大きなメリットだと考えます。今までシカ一頭のうち2、3割しか商品として利用できなかったところを一頭まるごと利用できるというこのビジネスモデルを成立させることができれば、日本全国にある獣害被害の解決になるのではないかと考えます。

また今まで笠置町という街だけでやっていた事業を、近隣の3市町村と合同で進めていくことが決まりました。このように笠置町以外にも、同じ問題を抱えている地域に手を伸ばしていきたいと考えています。

私達が提唱している概念で、“サークル・オブ・ライフ”というものがあります。直訳すると命の輪という意味で、ありとあらゆる生物が釣り合いを保ちながら生存しているというものです。シカやイノシシが増えていった背景として、人間の経済活動がかなり影響していると言われています。この数百年、人は生態系の輪からかなり逸脱してしまっているので、人が本来担うべき生態系の輪に人間を戻していこうということです。最近家畜が与える環境への影響がかなり注目されています。ヴィーガン (vegan) やプラントベースのような概念が広がっていく中で、肉を食べることが悪なのではなく生態系の輪から逸脱して家畜を育てることが問題だと考えています。ジビエを食べることが必ずしも悪なのではなく、地域にとって良いこともあるということをサークル・オブ・ライフという言葉を使って発信して行きたいと考えています。

本日はありがとうございました！

<注釈>

- ※1 Project Based Learning, 課題解決型学習と呼ばれる。暗記などの受動的な学習ではなく、自ら問題を発見し解決する能力を養うことを目的とした教育法。
- ※2 狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉のこと
- ※3 企業間の取引を指し、企業が企業に対して物やサービスを提供する。
- ※4 企業と一般消費者間の取引を指し、企業が消費者に物やサービスを提供する。



<取材：理工学部 出野 雅治／農学部 水野 紗那>

龍谷大学学生気候会議振り返り座談会

ー【龍谷チャレンジ採択活動】 龍谷大学学生気候会議（2021年12月開催）を振り返るー

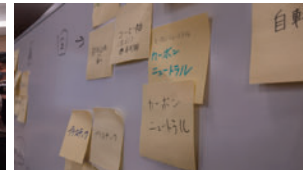
龍谷大学学生気候会議が2021年12月5日（日）、12月11日（土）の2日間にわたって深草キャンパスで開催された。近年、主に欧州で開催されている「気候市民会議」をもとに組織された本会議には、様々な学部・学年から集まった24名の学生が参加した。

「脱炭素社会」に向けて温暖化対策の現状や目標について話し合い、会議で出された意見は入澤学長にも提出された。これらの実績等も踏まえ、2022年1月27日、龍谷大学は「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を発出した。

→詳しくはこちら <https://lorcinfo.wixsite.com/website>（右のQRコードからもアクセスできます）



龍谷大学学生気候会議 1日目の様子

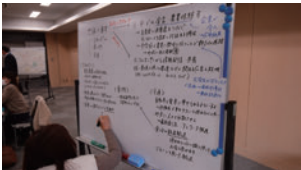


議論の様子

模造紙に書かれた「脱炭素社会の姿」

ディスカッションで使用されたポストイット

龍谷大学学生気候会議 2日目の様子



グループワークの様子

発表の模様

修了証を掲げて記念撮影

「気候市民会議」とは？

フランス政府は、2019年10月、政治参加を求める市民の声に応え、電話番号をもとに無作為に抽出した150人の市民を対象に「気候市民会議」を招集した。この会議の目的は、市民の目線から気候変動問題について議論を重ねたうえで、具体的な政策を政府に提示することだった。

このようにして始まった気候市民会議は、現在欧州を中心に世界中で開催されている。

「龍谷チャレンジ」とは？

龍谷エクステンションセンター（REC）では、地域連携事業の一環として学生生活動支援制度「龍谷チャレンジ」を実施している。この制度は、学生の正課外における自主活動及び社会や地域と連携した社会貢献活動を支援するもので、「龍谷大学学生気候会議」は、2021年度「龍谷チャレンジ」に採択された活動の一つである。

→詳しくはこちら（右のQRコードからもアクセスできます）
https://www.ryukoku.ac.jp/campus_career/activity/smap.html



座談会 ～龍谷大学学生気候会議を振り返って～

2022年2月28日、龍谷大学学生気候会議に関わった学生が集まり、同会議を振り返る座談会を行った。今回の振り返り座談会には、会議を運営した学生実行委員会の学生3名と、会議に参加した学生3名の計6名が参加し、学生気候会議を終えて感じたことや、学生主体で開催した同会議のこれからについて意見を交わした。今回の座談会では、学生気候会議実行委員会の代表を務めた松本さんに、ファシリテーターを行っていただいた。

なお、本座談会は新型コロナウイルス感染症の蔓延状況を踏まえ、Zoomを利用しオンラインで開催した。

座談会参加者の紹介

学生気候会議実行委員会・運営メンバー



松本 泰地さん
国際学部4回生

上林 涼さん
政策学部3回生

林 陸さん
政策学部2回生

学生気候会議 参加メンバー



岡村 勇樹さん
経営学部4回生

松田 あゆみさん
法学部3回生

中原 千尋さん
政策学部1回生

12月に開催した学生気候会議後の動き

松本：皆さんおはようございます。龍谷大学学生気候会議実行委員会代表の松本です。まず僕の方から会議後の動きについて共有させていただきます。

去年の12月5日と12月11日に、皆さんに参加していただいて学生気候会議を開催しました。その後1月27日に、気候会議でまとめた意見を入澤学長に提出しました。

2月9日には、「持続可能な地域創造ネットワーク」の全国大会にお声がけいただき、この取り組み（学生主体の気候会議）が日本でも珍しいことから、今回の気候会議について「大学で学生機構会議を行うこと」はどのような意義や可能性を持っているのかを、政策学部の村田先生と私とで説明しました。

会議前後での変化

松本：気候会議の感想や、会議の前後で意識の変化などありましたか？

岡村：僕は2日目から途中参加させてもらって、環境問題よりも学生に対する見方が変わった。今の時代の僕ら学生は、意外と気候問題を結構重く受け止めているんだなっていう。そういう意味で「地球のことを考えるっていうことが、少数派のことではなくて、もうすごく当たり前になってきているんだな」っていうのが改めて実感できたと思ってます。

松本：確かにそれは僕もすごいと思いましたね。「こんなに（気候問題に関心のある学生が）いるんだなあ」と。確かに理工学部以外だったかな、（それ以外の）全部の学部から応募をいただいて。もうちょっと偏るかなと思ってたんですけど、こんなに（いろんな学部から応募が）来るんだなと思って。

それこそ豊田さん（豊田 陽介さん・気候ネットワーク京都事務所）が言ってたように、「未来は明るいぞ」と思いました。

中原：私はもともと環境問題とか気候変動に興味があって参加したんですけど。今回の会議を通して、自分と同じように興味関心のある人だけじゃなくて「これから勉強したい」って考えている人や、「なんとなく興味あるけどあんまり知らないな」みたいな人と話すことでも新しい発見を得られることを知った。

そして、興味はあるけどどう気候変動に自分でアプローチしていったらいいか分からなかったり、そもそも関心を持つきっかけがない人に向けた「知る機会」を設けることに意識が向くようになりました。それが多分、私にとって一番大きな変化だったかなって思います。

松田：コロナがあって、インターネットがすごく便利になる中で、「リアルタイムに議論する」という楽しさや、貴重さっていうのをすごく感じた。遮閉的な状況であるからこそ後回しにしてしまうことはすごく多くて、今しなくても機会っていくらでもあるように考えてしまう。

今回会議に参加してすごく思ったのは、今しかないことって、やってみて初めてその貴重さに気付く。会議に参加して、こうやって振り返って、「もっと早めにアクションを起こさないと発展が遅れてしまうな」とすごく感じました。

上林：会議が終わって、今後自分たちがどのくらい主体的に取り組んでいけるかが課題になってくると思うんですけど。その前提としての「学生の主体的な動き方」のノウハウがない状態で「何かしたい」と思ってる方が、今は多いんじゃないかなと思う。なので松本さんのように積極的に動い

てくださってる方達が、学生が主体となってこういう会議を立ち上げてきたというプロセスを伝えていくっていうのが、これからいろんなことを形にして行く中で大事なんじゃないかなって思ってます。

松本：確かにそう言われれば、「やりたい」と思ってもどうやってやればよかったのが分からない。ちなみに今回の学生気候会議について言うと、RECの「龍谷チャレンジ for SDGs」という事業があって。その中で「持続可能性に対してこういう取り組みをしたいです」という申請書を出して、審査が二回ぐらいあってから合格のお知らせを頂いて。そこからサポートを受けつつ、教授方のコネクションを活用しながら、僕たちでも考えつつやっていた。龍谷大学には資金面の援助だったり、サポートをしてくれるプロジェクトがあると思うので、そういうものを活用しながらうまくできればいいのかなと思います。



↑座談会の様子
上段:学生気候会議 運営メンバー
中段:学生気候会議 参加メンバー
下段:EFFECTORスタッフ
吉田 千尋(社会学部3回生)(左)
堀切 彩乃(文学部3回生)(右)

今後の気候会議の規模

松本：一般的な気候会議だと市で開催するから提言を提出するのは「市」ですけど、今回、提言作成に当たって「龍谷大学」と「京都市」の二つを対象として想定していた。「大学」と「市」、どちらの方が考えやすかったですか？

中原：私は、それぞれに良さがあるなと思う。例えば大学だったら、自分が毎日通っているからこそ気付けることがある。

岡村：龍大生の京都市に住んでいる人の割合はそれほど高くなかったりする。だから京都市に対してあまり具体的なイメージがわからないと思うんですね。なので京都市の方に提言を出したいなら、リサーチも必要になってくると思う。

出た意見やアイデアをまずは龍大で実際に試してみて、そこで実証されたデータを京都市に提出するとか。京都市を目指して、まずは小規模でやっていくっていうのは一つの正攻法のような気がします。

松本：最初は大学というミニマムスケールから始めて、そこからどんどん大きい規模で考えていく。すごく長い期間が必要にはなりますけど、とても面白そうですね。

-- EFFECTOR スタッフによるグループ取材 --

なぜ、気候問題？

ルーム①

堀切：気候変動の問題というのは、持続可能な開発目標（SDGs）などでも解決されるべきゴールのうちの一つとしてあげられていると思うんですね。例えば SDGs では社会・経済・環境の三側面から17のゴールが設定されていますが、そのように様々な問題がある中で、なぜ環境問題に対して取り組もうと思われたのですか？

松本：そもそも今回の活動は、LORC（龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター）という研究所の中で、北海道の「気候市民会議さっぽろ 2020」っていう取り組みが面白いから龍大でもやってみようと言われたことがきっかけです。

なぜ環境を取り上げたかという、ストックホルムの研究所が出している「ウェディングケーキ型モデル」っていうのがあるんですけど。SDGsを三つに分類した時に、一番下に環境が、その上に社会、その上に経済があるっていう考え方ですね。それこそ「気候問題を解決しなかったら、いくら経済的に発展しても持続可能性には至らない」とか「いくら人種差別や戦争がなくなったとしても、僕たちの住む地球がなくなっちゃったら元も子も無い」とか。なので、まず一番の基礎としての環境的な持続可能性を重要視しているからです。

あと、経済とか社会に比べて、「気候変動問題」となると市民一人ひとりの行動がすごく重要視される。政策で「こういうことをやっていこう」って言っても、市民が行動を変えていかないと大きな変化には至らない。なので、今回のような市民会議をやることで、市民一人ひとりの行動を促進できるんじゃないかなと思って開催しました。



↑ルーム①での取材の様子

学生気候会議を経ての手応え

ルーム①

堀切：次に、気候会議で得た手応えをお聞きしたいです。企画運営を通して学んだことや、気候変動について議論する中で得たものなど、ジャンルは問わずどんなことでも。

中原：私は、この会議に参加して、興味関心の薄い人やまだ詳しく勉強していない人と話す事でも新しい発見や考えを得られると知ったことが一番大きくて。専門家じゃない学生だからこそ、固定観念に囚われていない意見にすごく可能性を感じました。

松本：運営として関わる中で「気候変動に興味のある学生は意外と多いんだな」ってことにまずすごく驚かされました。ほぼすべての学部学科から、一回生から四回生まで応募があって、留学生の方にも参加していただいたんですけど、本当に色々な人が興味を持ってくれてるっていう状況をすごくうれしく思ってます。

その上で、今回は「気候会議」っていう、実際にアクションを起こせる機会を提供したんですけど、そういう「きっかけを提供すること」がすごく重要だなと思ってて。こういうきっかけがもっとあれば、「気候変動問題について考える」とか「学生間でアクションを起こす」っていうのがもっと頻繁に起こるのかなって思っていて。その可能性はすごく感じましたね。

あとは持続可能性についても環境問題の解決の道筋が見えてきたなってすごく感じました。僕自身も環境問題について興味があって勉強してるんですけど、今回の気候会議で、自分の知らない側面やいろんな問題の現状について知れて、もっと色々な知識を得られたと思います。

上林：印象的だったのが、「学生が主体となって活動する場に、学長も動かせるんや」っていうこと。開会宣言の時もすごくしっかり学長がお話ししてくださって、学生がしっかり動けば大学側も真摯に受け止めてくれて、しっかり形にできるんだなっていう、そういう一つのモデルを肌で感じられたのが、運営として参加できてすごく良かったこと。

こういう機会をもっとフランクに開催できる場が大学にあれば、より良い考えを持った学生が、それを自分の中に秘めているだけではなくて、外に広げていける知識として発信する場が生まれてくるんじゃないかなと思います。

関心のない学生にどう声を掛ける？

ルーム①

堀切：持続可能なキャンパスライフを目指して、今回皆さんで具体的な意見をまとめられたと思うんですけど、現実的な問題としてそういう問題意識や意見っていうのは現時点では全ての学生や市民の間で共有されているものではないと思うんですね。そういった様々な問題に対して関心がなかったり、関心はあるけど詳しくはないっていう人に対して伝えたいことはありますか。

また、こういう取り組み（学生気候会議）を学生主体でやっていること自体知らない学生もいるじゃないですか。そういうところも含めて、色々な視点から何かお考えがあれば。

中原：多分、「一緒に動きましょう」って言って一番動いていただきやすいのって、興味はあるけどどこから取り組んだらいいかわからないっていう方だと思うので、そういう方に一緒に取り組んでいただく機会を設けるのが、先にやり方や場所を知っている私たちのできることかなって思っています。

松本：僕が思うのは、まず「持続可能性」とか「環境問題」って聞くとすごく堅苦しいとか、「今の生活を我慢しないとイケない」っていうネガティブなイメージがある。

でも今回の気候会議の中ではいろんな側面についての情報提供があったんですね。それを通して、持続可能性とか環境問題に対するイメージがガラッと変わったという声をいくつか頂いていて。もう今は、持続可能性や環境問題は解決できるものっていうことをまず伝えたい。

実際に何ができるかっていうのは難しいところなんですけど、こういう気候会議に参加したり自分で調べてみると、実現への道筋が見えてくる。そういうきっかけは（僕たちから）提供できる。

例えば龍谷大学には「龍谷ソーラーパーク」っていうのがあって、そこで作っている電気の量はもう少しで龍谷大学が一日で消費している電気の量を上回る可能性も持っている。そういうふうに龍谷大学でもカーボンニュートラルを実現できる可能性はありますっていうことや、そういう現状をもっと知っていただきたいかなっていうふうには思います。

堀切：「やってみたら意外とハードルの高いものじゃない」みたいな。

松本：そうですね。意外と我慢しなくても、新し

い道はあるっていうか。例えば旬の食材を食べるだけでも環境には優しいっていう側面もある。そういうところも知っていただけたら、もう少し取り組みやすくなるのかなって思います。

上林：自分自身、生活している中で知らないうちに環境問題に貢献していたり寄与していたりすることって意外とあるんだなあっていうことに（気候会議を通して）気付けたので、やっぱりそういう知識を得られる場っていうものがもっと広くなければ、と思います。本当に（関心が）ない人には、「こういう環境会議というものが行われて、形にできた」ということを知らせるだけでも、多少の意識（の変化）に繋がるんじゃないかなと思います。



↑ルーム②での取材の様子

ルーム②

吉田：気候変動や環境問題などに関心がない学生やこの記事を読んでいる方に向けて、伝えたいことはありますか？

岡村：環境問題について考えるということは、ハードルの高いことではないと思います。それに、自分たちの将来や、子供・孫の世代を思えば環境問題は自分たちにも無関係ではないと思う。

今は SDGs という言葉も世の中に浸透し、若者がそういう問題に目を向ける段階になってきている。一人ではできない中でも連携をして、声を大にして、一緒に取り組んでいければうれしいです。

松田：今回は第一回目だったので、元から環境問題に関心のある人が多く集まっていたように思います。でも、興味はあってもまだ知識はなかったり、行動はまだ起こせていないという人もいました。

今回の気候会議は、そういうふうな「分からないけどとりあえず参加してみよう」という気軽な気持ちでも良い議論が出来る場だった。なので、迷っているならぜひチャレンジしてみしてほしいと思います。

林：やっぱり、「環境について考える」って難しいイメージが自分もありました。参加者同士でも、最初は「難しそうですね」という会話ががあった。

ですが、今回の気候会議は、専門家の人たちの話を聞いて、それを踏まえて議論するという場だった。だから自分でも議論に参加することができた。

運営する側も、参加者が専門的な知識を持っていないことを前提に会議を組み立てようという意識がすごく高いので、どんどん気軽に参加してほしいと思います。

松田：今この記事を読んでくださっている行動力がものすごく重要で、その行動力や気持ち、少しの関心を捨てないでほしいと思います。自分一人ではなにもできなくても、今回の会議のような人が集まる大きい場に自分が一人加わることで、できることの幅ってものすごく広がると思っています。

思いはあるけど「なにもできない」と思っているなら、こういう取り組み方もあるということを知ってもらえたらと思います。

岡村：良い未来を一緒に生きていきたいので、そのためにもこういう場に参加することは自分にとっての新しい発見のきっかけになっていいのではないかと思います。

林：今の大学生は、コロナで授業がオンラインになったり、対面での会話の機会があまりなかったりする。だから大人数で話し合ったこと自体が久しぶりで楽しい空間だったし、知り合いもできた。なので環境について考えるという熱い意志がなくても、「人と話しに行こう」という気楽な機会にってもらえたら、運営側としてもすごくうれしいです。

7

エネルギーをみんなに
そしてクリーンに

13

気候変動に
具体的な対策を

17

パートナーシップで
目標を達成しよう

田中宮市営住宅における防災の取り組み

2019 年から龍谷大学では、京都市伏見区にある田中宮市営住宅自治会、京都市と協定を結び、田中宮市営住宅にて地域とつながりながら暮らす 3L APARTMENT プロジェクトを開始した。
今回は、田中宮市営住宅で自治会長を務める岡田 俊秋氏に、自治会で取り組んでいる防災について話を伺った。

自治会設立とその目的

田中宮市営住宅における自治会は、元々は市営住宅の駐車場契約者団体、カークラブと呼ばれる組織から派生して自治会としての形が作られた。田中宮市営住宅自治会の年会費は 500 円と、他地域の自治会と比べて安価に設定されている。年会費を抑えた理由は、自治会に参加するハードルを極力下げるためだという。地域のつながりや人間関係が希薄になりつつある今の時代だからこそ、自治会に参加してほしいという岡田会長の思いがここにある。自治会は、非常時における助け合いや、地域住民の横のつながりを強めることが主な役割である。しかし、非常時における協力は日々の生活の中ではなかなか想像してもらえず、自治会活動に理解を示されないことも多いという。

自治会における行事の中でも、子供向けの活動は大きな役割を担っている。子供向けの活動の特徴はその対象者の広さである。中心となる子供だけでなく、その保護者達も対象になってくるからだ。大人だけではできない横のつながりが、子供達を介して生まれていく。子供を持つ親世代は、独身世代と比べて地域のコミュニティに深く入り込み、相互的な理解を深めようとする傾向が強い。地域と自分の子供のつながりをもとに、自分達も地域の輪に加わり、より連携を強めようとしていている。また盆踊りなどの行事は、地域を跨いで人を集める効果が見込まれ、地域を活性化させる役割も担っている。現在はコロナ禍により外出が制限され、外で交流する機会が少なくなってしまったが、感染対策を徹底したうえで自治会行事を行い、子供達の交流する機会を増やしていきたいと岡田会長は話されている。

自治会での炊き出し訓練

自治会での防災への取り組みとして、消防署と連携したイベントが開催されていた。しかしイベント参加だけでは一時的な防災意識の高まりはあっても、その後の持続が難しい。持続性のある活動をと考えた結果、炊き出し訓練が行われるようになった。ここで振舞われるのは田中宮市営住宅の名物である粕汁だ。2020 年の 3 月後半に、当時は豚汁とジャガバターを調理し、地域の人々で食したのが炊き出し訓練の始まりである。初めは豚汁であったが、体を温める酒粕の特性や、災害時に食べてもほっとできるものを、という考えから酒どころである伏見の人々になじみ深い粕汁が作られることになった。

岡田会長は、取材の際に粕汁の魅力をこう語られた。まず初めに災害時における炊き出しに必要とされる条件として、ライフラインが止まった場合でも作りやすいもの。そして一品であっても満足感をしっかりと味わうことのできるもの。粕汁は具材を切った後は鍋で煮込めばそれで完成であり、調理が容易である。また汁物ということから、冬場の寒い時期には体を温めることもできるなど粕汁の持つ役割は大きい。

炊き出し訓練を定期的に行うことで、地域住民の団らんの場を作りだすことも訓練の目的の一つとなっている。

田中宮市営住宅では防災ベンチが設置されており、炊き出し訓練では実際にこの防災ベンチが使用されている。防災ベンチとは、通常時は休憩の取れるベンチとして、非常時にはベンチのボルトを取り外すことで竈として利用できるというものである。



田中宮市営住宅名物 粕汁

材料（大鍋：20 人分）

- ・大根：2 本
- ・金時ニンジン：4 本
- ・ちくわ：6 本
- ・豚バラ肉：800 グラム
- ・コンニャク：3 パック
- ・酒粕：500 グラム
- ・赤味噌：適量
- ・鳥ガラ：適量
- ・麵つゆ：適量
- ・水：適量

作り方

- ①材料を適当な大きさに切る
- ②鍋に水、調味料、酒粕、切った具材を入れ、火が通るまで煮込んだら完成



(左) 田中宮市営住宅に設置されている防災ベンチ
(右) 竈として使用している様子

龍谷大学＋日本 3 大学＋台湾 6 大学による「日台大学地方連携及び社会実践連盟」発足

日本・台湾の高等教育機関では、「地方創生」をキーワードに、社会課題に対して様々な立場や視点から産官学連携事業、地域人材育成や地域連携事業を展開してきました。

台湾では、少子高齢化や地域格差の拡大といった日本と共通の社会課題を抱えており、地域創生に向け大学が積極的に関わることが社会から求められています。そのようななかで、台湾では 2019 年を「地方創生元年」と定め、この前後において、大学による地方創生の取り組みとして地方政府や産業界そして高等教育機関等が連携する、いわゆる「産官学・地域連携」が加速しました。台湾の大学では、日本の大学との間で社会連携・社会実装の成果を共有し、優れた事例の実践に向けた連携を進めるべく、日本の大学に対してアプローチがなされてきました。

その一つとして、「地方創生」に関する大学連携の国際発展を目的に、日本の 4 大学（高知大学、信州大学、千葉大学、龍谷大学）と台湾の 6 大学（国立暨南国際大学、国立成功大学、国立中山大学、東海大学、国立高雄科技大学、国立台湾海洋大学）が学術交流、教育連携、産業振興に向けた新たなプラットフォーム、「日台大学地方連携及び社会実践連盟」を発足する運びとなり、2021 年 11 月16 日(火) にオンライン上で学長調印式を開催しました。

今回発足した日台連盟では、加盟大学との間で地域連携事業に関する情報共有を「多対多」で行い、社会課題の解決に向け、様々な分野でプロジェクトや交流事業の企画・実施を行うほか、国際化のための議論や交流、情報発信を行っていきます。



製作スタッフ編集後記

学生の皆さんが本紙を目にし「何かしたい」という気持ちが芽生えるでしょう。しかし、「ハードルが高いな。。」そう感じる人もいますよね。そんな時はまず、周囲の人を幸せにしてください。そんな人が増えれば社会はよくなると思います。
＜政策学部／安井 大斗＞

本紙の製作を通して、コロナ禍二年目という変化の激しい時代の中でそれぞれが工夫して変化に対応していく姿をみて学ぶべき部分はたくさんあるように感じました。私自身もこれからの学生生活や社会に出ていくにあたって精進していきたいと思っています。
＜理工学部／出野 雅治＞

本誌製作にあたりコロナ禍の影響で予定の変更を余儀なくされることもありましたが、無事に完成させることができました。製作にご協力くださった皆様に感謝申し上げます。
＜農学部／水野 紗那＞

本紙の製作を通して、コロナ禍の影響で、取材の形態の変化や日程の再調整など工夫が必要な部分もありましたが、多くの事を学ぶことが出来ました。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。
＜社会学部／吉田 千尋＞

普段あまり積極的に行動できない私にとって、製作スタッフとして今号を完成させられた経験にはとてもポジティブな意義があったように感じます。ご協力くださった方々、表紙デザインに助言をくれた沖田真美さん、ありがとうございました。
＜文学部／堀切 彩乃＞

他の製作スタッフの方や REC の川崎さんがとても優しくて前向きに楽しく製作に取り掛かる事が出来ました。本当に協力して下さった皆様ありがとうございました。
＜文学部／宇山 友悟＞

